

トマス・ハーディと教養小説

坂 田 薫 子

序——ハーディと（反）教養小説

十九世紀ヴィクトリア朝のイギリス小説の形であると多くの研究者たちが定義する「教養小説 (Bildungsroman)」は、トマス・ハーディ (Thomas Hardy) の『日陰者ジュード』 (*Jude the Obscure*, 1895) で終わりを告げる、あるいはハーディの著した小説は反教養小説であると明言する論文がいくつも存在している。例として、『ジュード』と教養小説の関係について研究した論文でよく引用されるジョージ・レヴァイン (George Levine) の明解な主張を紹介すると、レヴァインは『ヴィクトリア朝小説の読み方』(2008年)の第四章「ジェイン、デイヴィッド、そして教養小説」で、まず教養小説に次のような定義を与えている——教養小説とは新しく登場した中産階級に所属する若者の成長記であり、十九世紀、それも特にヴィクトリア朝ならではのものである。そこで描かれる主人公の歩む人生は伝統的な社会から近代的な社会へ、それも資本主義へと変化する社会の中でしか経験できない人生であり、主人公は伝統に反発しつつ、折り合いをつける。別の言い方をすれば、幻想から目覚め、社会上昇を果たすことで成長を遂げることが叶う。

教養小説の特徴をこう定義したうえで、レヴァインは次のように『ジュード』を分析する——資本主義によって生まれた新しい社会における階級移動の可能性を肯定する、いわばヴィクトリア朝という社会でなければ生まれてこなかったイギリス教養小説は、「ハーディが『ジュード』を執筆した

2 坂田薫子

ころには」(97)すでに「ヴィクトリア朝的な『成長 (Bildung)』は「自然消滅して」(98)いる以上、「実質上、存在し得ないものになって」(97)おり、『ジュード』は「ヴィクトリア朝の最後の教養小説」(88)、あるいは「教養小説の形式と、その基本的に楽観的な含意の一種の反転、ないしは挽歌」(88)、「反教養小説」(88)と呼ぶことができる。このようにレヴァインは主張している。

また、教養小説とは十八世紀後期に伝統的な農業社会が崩壊したため、都市において、今までよりもずっと不安定な人生を送らねばならなくなった十九世紀の次世代の若者たちに、世の中での生き方を教える教訓小説であると定義するジュリア・ブラウン (Julia Prewitt Brown) も、『オクスフォード版ヴィクトリア朝小説の手引き』(2013年)の第三十一章「イギリス教養小説の道徳領域」で、先に紹介したレヴァイン、そしてジェローム・バックリー (Jerome Hamilton Buckley) や¹、このあと触れるグレゴリー・キャッスル (Gregory Castle) を取り上げ、教養小説の伝統は『ジュード』によって終わる、あるいは根本的に変容させられるというのがヴィクトリア朝文学研究者たちの共通認識であると指摘したうえで、主人公ジュード・フォーレイ (Jude Fawley) は「ヴィクトリア朝最後の教養小説主人公」(676)であると述べている。

1. 教養小説の定義

ただし、サラ・ライオンズ (Sara Lyons) が論文「最近のヴィクトリア朝研究と教養小説」(2018年)の冒頭で、“bildungsroman”という表現は「文学研究において最も議論のある表現の一つ」(1)であると指摘するように、イギリスにおける教養小説とはどういう小説なのかについての定義はあいまいで、レヴァインのように十九世紀、その中でも特にヴィクトリア朝に限定する研究者がいる一方で、フランコ・モレッティ (Franco Moretti) のようにヘンリー・フィールディング (Henry Fielding) の『トム・ジョーンズ』(*The History of Tom Jones, a Foundling*, 1749) から議論を始める研究者

がいたり²、グレゴリー・キャッスルやジェッド・エスティ (Jed Esty) のようにヴィクトリア朝以後のモダニズム文学を議論の対象とする研究者もいたりして、時代区分を見るだけでも多岐にわたっている。

しかし、多くの研究者がほぼ必ずと言っていいほど拠り所としたり、出発点にしたりしているモレットの「最も影響力があり」(ライオンズ 2)、「権威ある」(ライオンズ 3) 研究書『世の習い——ヨーロッパ文学における教養小説』(1987 年) は、ヨーロッパの十九世紀小説をその研究対象としているため、イギリス文学全般ではなく、イギリス十九世紀文学にその範囲を限定したいくつかの事典のうち、最も手短かにまとめているジョン・サザーランド (John Sutherland) の『ロングマン版ヴィクトリア朝小説の手引書』(1988 年) の「教養小説」をその項目ごと引用してみると、サザーランドは教養小説を次のように説明する。

Bildungsroman. This term, from German, applies to novels dealing with the youth and moral growth of a hero(ine), usually identifiable with the novelist. The genre was inspired by Goethe's *Wilhelm Meister* (1786–1830), a novel in which the hero's main aspiration was his own self-fulfillment, or *Bildung*. *Entwicklungsroman* (development novel) is an alternative label. In England, the *Bildungsroman* was in vogue during the 1840s and 1850s. Famous examples are Thackeray's *Pendennis*; Dickens's *David Copperfield*; George Eliot's *Mill On The Floss*; Amelia Edwards's *Barbara's History*; J. A. Froude's *Nemesis Of Faith*. A remark by the hero of the last that "I have nothing but myself to write about" could serve as a motto for the whole genre. As developed by the English novelists, the *Bildungsroman* habitually displayed an ironic attitude towards the innocent *foibles* of youth and a strong emphasis on moral education through ordeal. (Sutherland 63)

サザーランドは「イギリスにおける教養小説の流行は 1840 年代と 50 年代にあった」(63) と定義している。これは言い方を変えれば、イギリスの教養小説の流行は 1850 年代で終わったということになる。では、なぜ 1850

年代でその流行が終わってしまったのかと言えば、それは、ダーウィニズムによって、「ヒーロー、ヒロインの道徳的成長」(63)、「試練を通しての道德教育」(63)は本当に果たし得るのだろうか、と、それまでの教養小説が掲げてきた価値観が疑問視されるようになったことに一因があるのだろう。ダーウィン以降のいわゆる教養小説では、それまでの「若者の無垢な性格上の些細な欠点への皮肉に満ちた態度」(63)にひとひねりが加えられ、生存競争に負けて滅んでいくヒーロー、ヒロインがあわれみを持って描かれる一方で、適者生存を果たすいわゆる敵役のしたたかさがどこか醜く描かれるのと同時に、生き残れないヒーロー、ヒロインの「性格上の欠点」(63)に作者の「皮肉に満ちた態度」(63)が読み取れるように変化している。生き残れないヒーロー、ヒロインの「性格上の欠点」(63)はもはや「無垢」(63)と形容できるものではなく、どちらかと言えば致命的で自己破壊的なものに変化しているのである。

2. ハーディ文学の特徴

そこで、ここでダーウィニズムがハーディに与えた影響について簡単に確認しておこう。自然に囲まれた幼少時代を送ったハーディは、自然の進化、退化の過程を自らの目で観察し、自然界で生きることの厳しさを知り、自然界には冷酷な「意思」が働いていると考え、それを自らの作品内で「宇宙の内在意思 (the Immanent Will)」、「運命の支配者 (Doomsters)」などと名付けて描写する。時間と偶然に支配された無情な世界が描かれる彼の作品では、登場人物たちがこうした「意思」に弄ばれ、負けると分かっている戦いを挑み、露と消え果てていく。

ハーディの小説世界では、こうした自然界の「意思」は主に二つの形をとって現れる。まず自然界の「意思」は主人公の中にある本能の形をとって現れ、理性の抑制のきかない衝動が主人公に一生償いきれないような報酬を課したり、あるいは主人公の中の遺伝となって現れ、生まれたときから自分の力ではどうしても排除できない運命として主人公に付きまとった

りしながら、主人公の内側に存在するかのように描写される。前者の分かりやすい例としては、ハーディによって“a man of character”と呼ばれた『カスターブリッジの町長』(*The Mayor of Casterbridge*, 1886)の主人公マイケル・ヘンチャード(Michael Henchard)を挙げることができ、後者の分かりやすい例としては、『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the d'Urbervilles*, 1891)の主人公テス・ダービーフィールド(Tess Durbeyfield)やジュードの家系の問題を挙げることができるだろう。もう一つの形は、自然界の「意思」が主人公の外側に存在するかのように描写される場合である。その場合、自然界の「意思」は社会因襲や社会制度の形をとって現れ、主人公を敗北者としてしまう。例えば、テスを苦しめる福音主義に基づいた社会の厳粛な倫理観や、ジュードを苦しめる階級制度や結婚制度などが例としてしばしば言及される。つまり、ハーディの小説では、ダーウィニズム的な、人間から見れば無情な自然の力は、主人公の中にある本能、性格、遺伝、あるいは主人公の外にある社会因襲や社会制度の形をとって、あるいは双方が同時に主人公に襲いかかり、自分の力ではコントロールできない、何か大きな力に押しつぶされていく、無力で卑小な人間の姿が描かれているとまとめることが可能なのである。

こうした世界観が描かれるハーディの小説では、理性は必ずしも役に立たず、自助努力は報われないため、いわゆる教養小説が成り立たない。果敢に戦いを挑んだ登場人物は多くの場合死を迎え、ずる賢く環境に適応した敵役たちが生き残るハーディの小説では、先ほど紹介したサザーランドによる「教養小説」の定義にあった「道徳的成長」(63)は描かれ得ないわけだ。例えば『ジュード』では、そのエピグラフ「儀文は殺す」が示すように、儀文、言い換えれば社会通念が、登場人物たちの人生を狂わせる。儀文(社会通念)の無意味さを悟り、それを乗り越えようとする点でジュードは成長しているともとれるのだが、制度や通念にとらわれず、自分らしく生きようとしたジュードは倒れ、そうしたものにひれ伏したスー・ブライドヘッド(Sue Bridehead)も倒れ、そうしたものをうまく利用して生き

るいわゆる敵役たちだけが生き残る。この点で、確かに『ジュード』は冒頭で紹介したレヴァインが主張するように、反教養小説と見なすことができる。ただし、そこにはハーディによる社会因襲や社会制度への批判も含まれていると考えられる以上、ハーディが、果敢に戦いに挑み、敗れ去っていくヒーロー、ヒロインの生き方を否定し、「道徳的成長」(63)を鼻で笑うような態度を取るアンチ・ヒーローやアンチ・ヒロインの生き方に軍配を上げていると結論付けることもできない。

3. 反教養小説としての『ジュード』

では、ハーディ小説を、その中でも特に『ジュード』を反教養小説と見なす研究者たちは、なぜハーディが反教養小説を描いたと考えているのか、別の言い方をすれば、なぜ『ジュード』は反教養小説と見なせるのか、ではなく、ハーディが、彼らが反教養小説と見なす『ジュード』で主張しなかったことは何だと考えているのか、特徴的な論文をいくつか年代順に取り上げて以下に紹介してみたい。

フランク・ジョルダーノ

1972年に発表されたフランク・ジョルダーノ (Frank R. Giordano, Jr.) の論文「『日陰者ジュード』と教養小説」は、『ジュード』を十九世紀の伝統的な教養小説と比較し、その大きな違いとして、ジュードは確かに成長しているのに、悲劇に終わる点を挙げ、その理由を、人間性を奪う社会の方に見出している。ジョルダーノは、教養小説とは普通、社会は成長していく個々人がすぐに順応できる、包括的で調和した有機的統一体であるという確信、人間は成長し、社会は発展していくという楽観主義に基づいていると指摘する。しかし、十九世紀後半になると世界から神は消え、世の中は人間の希望に無関心で偶然に支配されたものに変貌を遂げている。『ジュード』においても社会は人間性を奪う世界へと変化し、感受性豊かな人間にはもはやふさわしくない場所として描かれている。そうした世界を

描くことでハーディはヴィクトリア朝社会の在り方を批判しており、その点で『ジュード』は一種の反教養小説のように見えるとジョルダナーノは結論付けている。

エリザベス・ラングランド

次に、教養小説という表現は一度も使用していないものの、『ジュード』は主人公の成長、アイデンティティの確立の問題を扱っていると分析している点で教養小説論として紹介するに値する論文と見なされ得るため、1993年に発表されたエリザベス・ラングランド (Elizabeth Langland) の論文「『日陰者ジュード』における男としての成長」を紹介する。ラングランドは『ジュード』をアイデンティティとは何かを描いた物語として読解する。家父長制社会において男性たちは理想の男性性(マスキュリニティ)を押し付けられることにより、個人としての成長に制限をかけられ、葛藤する。社会が押し付けてくる階級とジェンダーの理想像と戦いながら、アイデンティティ形成を果たそうとする主人公ジュードを描くことで、作品『ジュード』は自分の生きる社会文化に抵抗してアイデンティティの形成をすることの困難さを伝えているとラングランドは主張している。

グレゴリー・キャッスル

2006年、グレゴリー・キャッスルは『モダニスト教養小説を読む』の第二章で、教養小説全盛期に可能であった、教育を通しての自己啓発と社会上昇は、1890年代には、エリートには教養を、下層階級には職業訓練を、という教育の区別化により、ローワーミドルクラスやローワークラス、それも田舎出身の若者には果たし得なくなり、初期モダニズム時代の教養小説は、それを認識できずに失敗していく主人公たちを描くことで、古典的教養小説と、それが理想と掲げる実利的な教養(成長)の批判の場となることがあったと指摘する。キャッスルはジュードの悲劇もその一つと見なし、ジュードの悲劇は、ジュードには許されなかった制度化された教育の形や

成長の方法とは別の成長の在り方が存在している可能性を提示してみせることによって、当時広く受け入れられていた社会化（社会との融合）の形態と古典的な成長の在り方の理想像を疑問視させる役割を果たしていると主張する。

アン＝ジュリア・ツヴァイヤーレイン

十九世紀の生物学の理論と教養小説の関係について論じた 2012 年のアン＝ジュリア・ツヴァイヤーレイン (Anne-Julia Zwierlein) の論文「社会階級の生物学」は、十九世紀の生物学研究の三つの分野——人体測定学、生理学による習慣形成理論、生理学的心理学で論じられた有機的記憶理論と退行理論——が当時の教養小説に大きく影響を与えたという視座から、三つの分野の影響が読み取れる作品として、それぞれ順に、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) の『オリバー・ツイスト』 (*Oliver Twist*, 1837–39)、『大いなる遺産』 (*Great Expectations*, 1860–61)、ハーディの『ジュード』を論じている。ツヴァイヤーレインによると、習慣によって形成された人格が次世代へと受け継がれ、努力による個々人の発展のみでなく、遺伝が強い影響力を持つと主張されるようになると、イギリス的な「成長 (Bildung)」の概念を支えてきたサミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles) の自助の理論が否定され、家系の呪いが説かれることになり、生物学的退行を扱った反教養小説が描かれるようになる。その典型例としてツヴァイヤーレインは『ジュード』を挙げ、主人公ジュードは社会の偏見と有機的記憶の力によって、建設的な自己形成の道を閉ざされたと説いている。

ジル・エネン

2017 年のジル・エネン (Jill Ehnenn) の論文「教養小説への新しい方向設定」は、ハーディの『ジュード』とルーカス・マレット (Lucas Malet) の『サー・リチャード・カーマディ』 (*The History of Sir Richard Calmady*, 1901) を、精神的、身体的なディスアビリティのある人物が主人公となる

教養小説は可能かを探ったものとして分析している。教養小説は教訓物語で、現行の社会の理想像を強化し、成長の見本を示すものであるが、ジュードを家系の呪いという遺伝上のディスアビリティを抱える人物であるがゆえに教養小説の求める成長ができない主人公に設定することで、ヴィクトリア朝の理想とは別の生き方、物語、成長があるのだということを読者に知らせ、異性愛、身体の健全性、目的論的同化や、正常であることを主張するシステムを批判し、違っていることは劣っていることではないことを伝え、社会から排除されている人びとを受け入れようと主張しているとエネンは説いている。

4. ハーディの小説論

以上のように、研究者たちはこれまで様々な読解法で『ジュード』の反教養小説性の意義を解き明かそうとしているが、そもそも、ハーディは自らの作品を教養小説にしようとして書いたのに反教養小説となってしまったのか、あるいは、こうした研究者たちが主張するように、何らかの批判精神を持って、当初から反教養小説を書こうとしていたのか、を考えるために、彼の小説論に注目してみよう。

ハーディは 1888 年に発表した「小説の有益な読み方」(“The Profitable Reading of Fiction”) で、次のように述べている。

It may seem something of a paradox to assert that the novels which most conduce to moral profit are likely to be among those written without a moral purpose. But the truth of the statement may be realized if we consider that the didactic novel is so generally devoid of *vraisemblance* as to teach nothing but the impossibility of tampering with natural truth to advance dogmatic opinions. Those, on the other hand, which impress the reader with the inevitableness of character and environment in working out destiny, whether that destiny be just or unjust, enviable or cruel, must have a sound effect, if not what is called a good effect, upon a healthy mind. (Orel 118、下線は著者によるもの)

教養小説の世界というのは、ステレオタイプ化を恐れず、敢えて分類するならば、勸善懲惡の世界を描いていると見なすことができる以上、いわゆる教養小説は、いわば道徳や教訓を伝えようとする小説と見なすことができる。すると、最初の下線部にあるように、「最も道徳的な利益をもたらす小説は、教訓を伝えようという目的を持たずに書かれた小説群の中に存在しているようだ」と主張することはどこか逆説的に思われるかもしれない」(118)という彼の主張から、ハーディは真の意味で読み手を考えさせることのできる小説とはいわゆる教養小説ではないと考えていたことがうかがえ、また、二つ目の下線部にあるように、「読み手に、運命——その運命が公平なものであらうと、不公平なものであらうと、うらやむべきものであらうと、残酷なものであらうと——を切り開く際の性格と環境の必然性(避けがたさ)を印象付ける小説は、必ず健全な(徹底した)効果——たとえいわゆる良い(待ち望んだ)効果ではなかったとしても——を健康な精神に対して持つに違いない」(118)という彼の主張から、ハーディは、登場人物の性格と彼らの置かれた環境、そして彼らの運命について論じる、宿命論的世界観を描く自らの小説のスタイルの方が、人生について読み手に考えさせることができると信じていたことが推察される。つまり、彼は登場人物たちの悲惨な人生を煽情的に描き、この世は生きる価値がないのだ、と読み手に伝えたかったのではなく、敢えてこうした暗い小説を描くことで、読み手に、その中に生きる意味を見出して欲しかったと考えられる。だとすると、彼の小説を読み終えるやいなや、彼にペシミストというレッテルを貼ることは性急な行為でしかないと言すべきなのだろう。上述のハーディの表現を借りれば、「逆説的に聞こえるかもしれないが」(118)、これまで例示してきた研究者たちによって反教養小説として分類されるハーディ小説は、いわゆる教養小説と同じ目的を持って書かれていたのかもしれない。

その一方で、次に挙げる引用のように、ハーディは『テス』と『ジュード』の序文、さらには1912年版のウェセックス・エディションの序文では、自分が書きたかったのは「教訓」ではなく、「印象」なのだと、自分の

小説の目的は「議論」ではなく、「印象」を伝えることなのだということさら強調する。

Nevertheless, though the novel was intended to be neither didactic nor aggressive, but in the scenic parts to be representative simply, and in the contemplative to be oftener charged with impressions than with convictions, there have been objectors both to the matter and to the rendering. (*Tess* “Preface to the Fifth and Later Editions” July 1892, Orel 26–27)

Like former productions of this pen, *Jude the Obscure* is simply an endeavor to give shape and coherence to a series of seemings, or personal impressions, the question of their consistency or their discordance, of their permanence or their transitoriness, being regarded as not of the first moment. (*Jude* “Preface to the First Edition” August 1895, Orel 32–33)

But such objectless consistency never has been attempted, and the sentiments in the following pages have been stated truly to be mere impressions of the moment, and not convictions or arguments. That these impressions have been condemned as “pessimistic”—as if that were a very wicked adjective—shows a curious muddle-mindedness. (“General Preface to the Novels and Poems” Wessex Edition, I, 1912, Orel 49)

辛辣な書評に嫌気がさし、ついに小説家としての筆を折るまでになった経緯を踏まえれば、非難をかわすための弁明に過ぎなかった可能性もあるが、これが本音ならば、ハーディは結果として教養小説、ないしは反教養小説と分類され得る小説を出版することになったとしても、当初は教訓に満ちた教養小説、ないしは反教養小説を書こうという意図はさらさらなかったと見なすことも可能であろう。

5. ハーディの「自叙伝」

最後に、上に挙げた引用にあるように、ハーディはその作品に描かれた

暗い宿命観ゆえに、存命中から今日に至るまで「ペシミスト」と見なされることが多い作家だが、本当にそうなのかを、実は彼の自伝と言われている、ハーディの二番目の妻フローレンス (Florence Emily Hardy) による伝記を「教養小説」として読んで考えてみよう。

彼の小説は宿命論に染まり、悲愴感漂うと言ってもいいほど悲観的な様相を呈しているが、妻の名で出版されてはいるものの、実はハーディ本人が執筆したと言われている伝記『トマス・ハーディの生涯』(*The Life of Thomas Hardy 1840–1928*, 1962) では、「主人公」ハーディは小説世界とは異なり、大した困難に会うことなく、すいすいと出世街道を突き進む。ハーディは、小説家として世に出るまでの自身については、努力を重ね、経験を積み、社会に順応しながら成長していった姿を描き、小説家として世に出たあとの章では、まさに日記を綴るかのように、出来事と人生観を羅列するだけで、そこに人生の苦悩は感じられない。自身の才能を誇りに思い、努力は報われると言いたげな内容は、もしもこれが小説ならば、まさに型通りの「教養小説」と呼んでもいいものになっている。例として、順を追って、いくつかの章の要約を紹介してみたい。実際は、語り手は妻フローレンスであり、ハーディは三人称の「彼」として語られているのだが、以下の要約では、敢えて「ゴーストライター」ハーディが語り手であるものとして要約してみる。

第一部第一章でまず語り手は、ハーディの父母がいかに素晴らしい人物であったかなど、ハーディ家の家系について語る。続いて語り手は、ハーディが幼少時代に二回以上年上の女性をも魅了したこと、ハーディがいかに幼少期から学問的才能に恵まれ、学問の習得が早かったかなどを語る。第二章では、ハーディが良き相談相手だったホレス・モール (Horace Moule) に建築業に専念するように助言されたため、それまで大学進学を夢見て、独学で身につけようとしていたギリシャ語の勉強を諦めたことが紹介される。そのことを振り返り、語り手は、あのときモールが勉強を続けるように助言してくれていたなら、ハーディは今頃オックスブリッジの学

監になっていたかもしれないとほのめかす。

第三章で語り手は、赴いたロンドンでのハーディの運の良さを、そして、健康は害したものの、ハーディがロンドンにいか順応していったかを語る。続く第四章とともに、ハーディが建築と文学のどちらを選ぶかで迷った様子を語る部分は、どちらにも向いていないのではないかと苦悩した様子を語っていると言うよりは、彼にはどちらを選ぶことも可能だったと振り返っているように見える。また、詩を送っても認められなかった際、ハーディが良い詩とだめな詩の区別のつかない編集者しかいないような雑誌に送ることはやめたことや、ハーディは詩が出版されることにはこだわっていなかったことが語られるあたりは、ハーディ自身が綴っているとしたら、強がりかもしれないが、尊大な態度でもある。

第四章で（そして第五章と第二部第六章でも何度か）語り手は、ハーディにとって建築事務所の仕事は頼まれたから「助ける」(63, 76, 84) つもりで引き受けたものにすぎず、処女作を書き上げるまでの「当座^{ヘルプ}しのぎ」(76)の仕事であったかのように語り、出版処女作が大作とならなかったのはジョージ・メレディス (George Meredith) の助言を文字通りに解釈してしまったハーディのナイーブさにあると認めてはいるものの、メレディスの助言が悪かったからであるかのようにも語っている。

第二部第六章でも語り手は、ハーディ自身は書きたくなかったのにセンセーショナルな内容の小説を書いたのはメレディスの助言が悪かったからであるかのように語る。さらには、建築家として成功への道を歩み始めていたように思われる際に、第二作、第三作を出版したのは出版社から請われたためだったかのように語る。第二部第七章以降は、ほぼ日記を抜粋する形のため、「私」で語られ、あまり物語性はなく、出来事や人生観のようなものが羅列されていく。そのためだろうか、作家として人気が高くなっていくにつれて、どこへ行っても歓迎されるようになったハーディが、いかに著名な人物たちとの交流をしていたのかが多く語られている印象がある。

第五部第二十三章では、『ジュード』を酷評した批評家が会いたいと言ってきたとき、自分は評判は気にならないし、自分の作品がどう解釈されるかは興味がないという旨の、丁寧な断りの手紙を「わざわざ書いてやった」(280) ハーディの行為を、語り手は「度量が大きい」(280) と賛美する。第六部第二十四章と第二十五章も含め、『テス』、『ジュード』と立て続けに小説を酷評された際、そうした批評を信じたのは、彼の小説を読んだことのない人間だけだったと言い切ったうえで、ハーディの天性の才能は詩作にあったのだと、小説を執筆してきたのは彼にとって不本意だったと語り手は明言し、ハーディが小説の筆を折った様子を語る。ハーディは実際には深く傷ついていたとしても、こうした描写に悲愴感はない。

第六部第二十五章で詩を批評された様子を語る際も語り手は、批評家たちには建築に携わった彼の経験が大いに生かされたハーディの詩の形式が理解できなかったのだと、批評家たちの無知さに不快感をあらわにする。ハーディの皮肉な物言いは、生まれながらのユーモアのセンスによるものなのに、ユーモアのかけらも持たない批評家たちには理解できなかったのだと切り捨てる。第二十七章では、『霸王』(*The Dynasts*, 1904, 1906, 1908) が酷評されたことについて、自分の哲学観、感情、芸術は時代を先取りしたものであるため、批評家はついてこれなかったのだと嘆いたハーディのメモ書きが紹介されている。

第七部第三十一章において最初の妻エマ (Emma Hardy) の死が語られるが、早くから夫婦仲が悪くなり、長い間家庭内別居の状態であったことはまったく触れられることなく、二人の関係は美化されている。第八部第三十五章で、多くの読者が自分の小説や詩の内容が自分の実体験を描写していると信じ込むことを長年快く思っていなかったハーディだが、それは彼の描写力が優れていたからだと言ひ手は賛美する。第三十六章では、創作はあくまで想像の世界なのに、自分の信条のように誤解されることに長年憤りを感じてきたハーディが、一般読者の知的レベルを少々高く見積もりすぎたようだと言ひ手紙が紹介されている。最終章となる第三十八章は、

これはハーディ本人の手によるものではないとしても、亡くなったときの死に顔を「人の想像を超えた輝ける勝利の表情であった」(446)と描写することで、この伝記を結んでいる。

結び

このようにハーディは、自らの小説では、多くのヒーロー、ヒロインには志半ばで悲劇的な死を迎えさせておいて、「自分史」はいわば成功物語として綴っている。小説の内容は確かにペシズムに満ちているが、自身の人生を生きる一人の人間としてはオプティミストと言っても過言ではないように思われる。第七部第三十二章で、ハーディはイギリスが大戦に巻き込まれる以前は、「人間性は徐々に改善される」(366)、「人間は少しずつ気高くなっていく」(368)というのが持論だったことが、そして第八部第三十五章では『「人が言うほどペシミストではなく、メリオリストである私は、もっと世界を信頼しています」(387)という彼自身のセリフが綴られていることから、その小説においては、教養小説とは正反対とも言えそうな筋を追い、個々人の成長にはどこか懐疑的であったものととらえられるハーディではあったが、(少なくとも第一次世界大戦以前、小説を執筆していた当時は)人類全体の成長は信じていたことがうかがえる。そこが、ハーディを、小説家としてはペシミストだが、自身の人生を生きる一人の人間としてはオプティミストとしたのかもしれない。

本論は2019年5月25日に安田女子大学で開催された日本英文学会第九十一回大会のシンポジア第三部門「反〈教養〉小説——適応をめぐる近代文学史」での研究発表に基づいたものであるが、文学ジャンル批評を用いて、ハーディの小説を教養小説として読み解いてみることにより、こうした様々な考察が可能になることが明らかになった。今後も、ハーディの小説を他の文学ジャンルに当てはめて読解し、ハーディ文学への理解を一層進めていきたいと考えている。

注

1 バックリーは『青春時代』(1974年)の第七章「トマス・ハーディ——『ジュード』の日陰性」で、『ジュード』は確かに教養小説だと指摘したうえで、この小説は教養小説の形を悲劇に適応させることに成功した最初のイギリス小説だと結論付けている。

2 ちなみにモレッティは『世の習い——ヨーロッパ文学における教養小説』(1987年)で、教養小説に必要な不可欠な要素である社会移動は中産階級でしか成り立たないため、労働者階級を描く小説で社会移動を描こうとすると、それは「物語の想像力に挑むことになる」(x)と指摘し、『ジュード』のような小説は教養小説には成り得ないと述べている。

引用文献

- Brown, Julia Prewitt. "The Moral Scope of the English *Bildungsroman*." *The Oxford Handbook of the Victorian Novel*. Ed. Lisa Rodensky. 2013. Oxford: Oxford UP, 2016. 663–78.
- Buckley, Jerome Hamilton. *Season of Youth: The Bildungsroman from Dickens to Golding*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1974.
- Castle, Gregory. *Reading the Modernist Bildungsroman*. Gainesville, FL: UP of Florida, 2006.
- Ehnenn, Jill. "Reorienting the *Bildungsroman*: Progress Narratives, Queerness, and Disability in *The History of Sir Richard Calmady* and *Jude the Obscure*." *Journal of Literary & Cultural Disability Studies* 11.2 (2017): 151–68.
- Esty, Jed. *Unseasonable Youth: Modernism, Colonialism, and the Fiction of Development*. Oxford: Oxford UP, 2012.
- Giordano, Frank R., Jr. "Jude the Obscure and the *Bildungsroman*." *Studies in the Novel* 4.4 (1972): 580–91.
- Hardy, Florence Emily. *The Life of Thomas Hardy 1840–1928*. 1962. London: Macmillan, 1965.
- Hardy, Thomas. *Jude the Obscure*. 1895. Ed. Dennis Taylor. London: Penguin, 1998.
- . *The Mayor of Casterbridge*. 1886. Ed. Keith Wilson. London: Penguin, 1997.
- . "The Profitable Reading of Fiction." 1888. *Thomas Hardy's Personal Writings*. Ed. Harold Orel. Basingstoke: Macmillan, 1990. 110–25.
- . *Tess of the d'Urbervilles*. 1891. Ed. Tim Dolin. London: Penguin, 1998.
- Langland, Elizabeth. "Becoming a Man in *Jude the Obscure*." *The Sense of Sex: Feminist Perspectives on Hardy*. Ed. Margaret R. Higonnet. Urbana: U of Illinois P, 1993. 32–48.
- Levine, George. "Jane, David, and the *Bildungsroman*." *How to Read the Victorian Novel*. Malden, MA: Blackwell, 2008. 81–99.
- Lyons, Sara. "Recent work in Victorian studies and the bildungsroman." *Literature*

- Compass*. 2018;15:e12460. <https://doi.org/10.1111/lic3.12460>.
- Moretti, Franco. *The Way of the World: The Bildungsroman in European Culture*. 1987. New Edition. Trans. Albert Sbragia. London: Verso, 2000.
- Orel, Harold, ed. *Thomas Hardy's Personal Writings*. 1966. Basingstoke: Macmillan, 1990.
- Sutherland, John. *The Longman Companion to Victorian Fiction*. Harlow: Longman, 1988.
- Zwierlein, Anne-Julia. "The Biology of Social Class: Habit Formation and Social Stratification in Nineteenth-Century British *Bildungsromane* and Scientific Discourse." *Partial Answers* 10/2 (2012): 335–360. <https://dx.doi.org/10.1353/pan.2012.0016>.